

10. 災害への関心を持って、備える

戦後は、確かに水害が多くあった気がします。小学校のときには近くの川にかかる木造の橋が流出したこともあるし、雨が降ると河川は増水して、家などが流されてくるものが少なくありませんでした。浸水するところは大体決まっているようだったが、うまく避難して犠牲者は聞いたことがありませんでした。その後上流にダムができたり、橋もコンクリートになったりして、大きな洪水はなくなっていったように感じていました。当時は大きな雨などがあると、近所や知人の間ではどうだったかという会話が当たり前で、なんか自然現象に寛容だったというか生かされているという感じがしたものです。いまは安心しきっているのか、そのようなことも秋の稲の出来具合を話題にする人もいなくなったようです。そのような社会環境も大きく変化しましたが、地球温暖化で降雨のパターンが確実に変化してきて、頻度や降雨量も局地的になってきたということで、大きな被害が報道されるようになりました。

これからは、これまで経験していないところでも、被害の経験がない人でも防災について考えておくことが求められていると思います。わが国ではいつ、自宅や旅先のどこでも起きて不思議でないのが自然災害ですが、日常に追われて、災害報道があっても対岸の火事程度とってしまいます。そこには、自分は大丈夫、何か起きれば行政が何とかするだろうという根拠のないことに頼っている心理があります。そこで、災害が起きた時に自分でできることとして備蓄がありますが、これは災害グッズだけではなく、知識とかよその経験も含めたところの知恵や工夫ということになります。いずれも、費用をあまりかけずに、その気になれば備えることができ、防災意識を日常化させるにも有効なことです。

あらためて、防災は何のためにするのかというと、被害を最小限にして、命を守り、平常の生活に早急に戻れるためにするわけで、日常の暮らしの中に取り込んでおくことが大切なことになります。特別に防災グッズセットを買って安心する必要もないし、日常的に防災を意識すれば、食料品にも工夫が出てきますし、100円ショップ程度の品物でも十分な防災もできます。それから、地域でのコミュニケーションも大事ですが、面倒なおつきあいはしなくても、会釈程度でも大事なことです。なにかあれば、遠くの親類よりよほど頼りになるのが地域に人たちはです。まずは自分の家で地震の時、水害の時一番に安全な場所、より高いところ、頑丈なものを見つけておきましょう。それから、備蓄の中身は、自分の家で何が必要なかを家族で話し合っておくことです。つまり、使えるものを備えることです。大事なことは、よそでの災害にも関心を持って、わが身と考えると、災害への関心を高めることが、自身の安全を守るための質の向上にもつながることになります。